

## エッセンシャルワーカーズの処遇

大津 隆文

コロナ禍で知った言葉の一つが「エッセンシャルワーカーズ」。私達の日常生活で、あつて当然と思つていた医療・福祉や保育、生活インフラ、小売業、運輸・物流、公共サービス等について、コロナによりいかに必要不可欠かを再認識させられた。しかもこれらの仕事の多くは対面で、従事者の感染リスクは小さくない上、それぞれに家族もあり大変であつたと思う。

全国的に感謝の機運が高まり、政府による医療従事者に対する慰労金や一部企業での特別手当の支給等もあつた。が、総体的にはその処遇は必ずしも恵まれたものではない。社会を支える「縁の下の力持ち」に黙つて甘えてよいのだろうか。

社会的に必要な不可欠な仕事をしている人達の給料が、相対的に低いのはなぜか。どうすれば是正できるのか。

白熱教室のサンデル教授の「配管工(生活に不可欠な水道屋)と投資銀行家との所得格差は公正か」という問題提起も同じだ。社会への貢献の度合いと収入の多寡とは関係なく、必ずしも高所得者≠偉い人ではないようだ。

現在の市場経済システムでは、賃金は市場で労使間の交渉によつて決まる。その修正には、政府による最低賃金の引上げや、特定の雇用への補助金支出も一法だ。また会社が利益を上げ賃上げ余力を高めたり、労働組合が強力に賃上げを求めることもプラスになろう。

他方、私達は生産者(労働者)であると同時に消費者である。消費者としては商品やサービスは少しでも安い方がいい。また国際化した経済では、海外から安い商品ももちろん労働力も入ってくる。賃金の下押し圧力は大きい。

処遇の劇的な改善が難しいのであれば、経済面以外で報いられないか。まず私達がエッセンシャルサービスに従事する方々に感謝の気持を常に発信していく。さらに「一隅を照らす、これ則ち国宝」とはまさに皆様のことであり、誇るべきお仕事です、人生お金だけではありません、頑張ってください、と励ましても救いにはならないか。